できることなら職場は楽な方がいい。誰でも私の代わりがいて、いつでも休めて、休んでも誰からも小言を言われない。そんな仕事がたまにはあっていいと思うんだ。そんなのないけれど。

私は喘息で学校を卒業してからというもの満足に働いたことがない。ほとんどの同級生たちが社会で切磋琢磨している間、入院したり家で療養したりしていた。時間を持て余して、いろんな無駄な考えが浮かんだりする。何のために生きているんだろうかとか、このまま人生を終えて何になるんだろうかとか。

だから時々考える。この病気がなければ、きっといろんなことができるだろうと。不可能を可能にできるのではないだろうかと。

私に影響を与えた一冊は『生協の白石さん』だ。不可能なものには不可能と書いてある。可能なことには大いに推奨してくれる。主人公は現役大学生と生協職員の白石さんなのだが、その舞台は大学であり、特別じゃないコミュニティ、どこにでもある箱の中で起きる「日常」だ。

私だけじゃなく、みんな自分にはない何かが欲しくて、日々常々を送っていると察する。

でも、どうしようにもないことだってあるじゃないか。みんな「自分」という与えられた箱の中で起きる「日常」を切り抜ける、ただそれだけ。

私はこの本を読んで、自分の箱の中で問い続け、いつか卒業すると決めた。